



●特集●

保育の原点としての「遊び」

保育学会第60回大会において「保育の原点を探る—遊びを中心においた保育の探求」というテーマの大会準備委員会企画シンポジウムが行なわれた。近年、保育を取り巻く状況が大きく変化している中で、保育の原点をめぐる地道な議論をするゆとりを失ってしまいがちだという声も聞く。

ここでは、シンポジウムの議論を引き継ぎ、研究者としての立場、実践の只中に身をおく立場からの、それぞれの理論の交流を試みることにした。今一度、保育の原点としての「遊び」を考える機会となることを期待したい。

「遊びを中心においた保育」のシンポジウムから見えてきたこと

上垣内 伸子

幼稚園観察でこれまで見てきたのは、自分のやりたいことを自分自身で見つけて動き出すと表情に真剣味が出てくることや、自分自身がやりたいことだからこそうまくいかなかったもとにかく粘る、という子どもの姿でした。そこから、自らが始めた遊びこそが子どもを育てる、子どもは自らの遊びを自ら遊びこむことで自らを育てていくのだと理解していました。ところが、この子どもの遊びが危うくなってきているのではないかと感じるようになってきました。保育者に求められる対大人役割の多様化と拡大への対応、学力低下に対する直線的解決方法としての教師主導による課題活動の漸増、幼児の自発的活動への適切な援助の難しさ故に生じる遊びの衰退が、保育現場で起きているのではないかと。また、家庭との連携、幼保小連携において保護者や小学校教師に子どもの姿や成長を伝える際、相手にわかりやすい表現で説明することで保育そのものまでわかりやすいものに変容してはいないかと。小学校学習指導要領低学年「体育」では、「遊び」が学習方法として多用されていますが、そこでいう「遊び」は幼稚園教育要領のそれとはかなり異なっています。相手の「遊び」の定義と自分の定義に違いがあると感じながらも、その違いを説明しきれないもどかしさを感じているという保育者からの声も聞かれます。

以上のことから、保育の中心に「遊び」を位置づけ、子どもが遊ぶとはどういう意味を持つ行為なのか、どうとらえて援助しようとするのか、それをどのように言語化する

のかを問うシンポジウム「保育の原点を探る—遊びを中心においた保育の探求」を第60回の保育学会にて行いました。話題提供と指定討論には、実際に幼稚園・保育所に関わってこられた5人の方をお願いしました。保育学や発達心理学の研究者であり附属幼稚園長の経験がおありの友定啓子先生と岩田純一先生は、子どもと保育者の実態をふまえた上で理論的側面からお話下さいました。現職幼稚園教諭である嶺村法子先生は、子どもの姿と保育実践を、自分の「遊び」のとらえに沿って言語化することに挑戦して下さいました。登壇をお願いした時に、「子ども時代に遊ばなくて何が子ども時代か」とおっしゃった矢野智司先生は、ラディカルに「発達」や「教育」、「有用性」とは異なる軸での「遊び」をお話し下さいました。

今回のシンポで見えてきたこととして、次の3点があげられます。1つは、遊びの実践的根拠と理論的根拠を乖離させることなく交差させながら議論していくことが保育援助も含めた「遊び」論議には不可欠であること。実践事例に語らせるだけでも、理論展開のみに終わるのでもなく。2つめは「遊び」という活動ではなく「遊んでいる」という活動の主体である子どもの主観的状态を問題にし、子どもの内側から遊びの意義を見つけようとする。活動内容に目を向けるだけでなく、どんなきっかけで出会い、どんな動機をもって始め、誰とどのような雰囲気の中で活動し、どのような心情を体験し、何を得たかという、遊びを支えている生活を視野に入れて、一人一人の子どもにとっての遊びや活動の意味を探り、遊びのプロセスに丁寧に関わっていくことが保育援助にも、そして他者へ伝える際にも求められることを、改めて確認できたように思いました。3つめは遊びについて考え話し合い続けること。その子にとっての遊びの意味は、後から見えてくることも多いし、時間経過と共にその意味も変容していくようにも思われるからです。

遊んでいる子どもにとって「遊ぶこと」は自己変容・成長の始まり。「遊び」について、一緒に考えていきませんか？

●Profile

上垣内 伸子 (かみがいち のぶこ)

十文字学園女子大学人間生活学部児童幼児教育学科

関心を持っていること：一人ひとりの子どもの主体性を尊重した保育の観察を通して考えていくこと、学生自身が自己成長感をもてる保育者養成に取り組むこと、現職保育者の先生方と保育実践について語り合うこと。

生命原理としての遊びと保育の課題

矢野 智司

子どもの成長にとって、遊びが大切だということは、これまでも何度も繰り返し論じられてきた。遊ぶことが大切な理由として、たとえばつぎのようなことが繰り返し語られてきた。遊ぶことで子どもは体が丈夫になる。また集団で遊ぶことで子どもはルールの大切さを学び道徳的な能力を高める。人間関係を学び友だち作りがうまくできるようになる。さらに、社会的認識や科学的認識を楽しみながら発達させることができる。あるいは遊びは心理的な安定をもたらす。つまり子どもが健全に発達していくためには遊びは不可欠であり、だから遊びが重要なのだというわけである。

しかし、このように遊びによってもたらされる教育的効果をあげることによって、私たちは本当に子どもにとって遊びが不可欠だということを、確信をもっていうことができるのだろうか。それというのも、いまあげた遊びの教育的効果なるものは、どれも遊びでなくても達成することができるものばかりだからである。いや、遊び以外の方法のほうが、より能率的にこの効果を達成することができるかもしれない。遊びは必ずしも必要ないのだという結論に終わってしまうのは、遊びについての問い方がまちがっているからだ。遊びがどのような教育効果をもたらすのかと問えば、答えは上に述べたようになるしかない。しかし、遊びについて問うべき論点を、効果や結果にではなく、プロセスに移してみると、それまでとは異なったものが見えてくる。

子どもは、遊びの世界において日常の生活以上に快活で自由になり、深く遊びの世界のうちに没入することができる。遊びの体験の特質はこの世界への没入にある。この世界への没入は言葉をかえれば、自己と世界との境界線が溶解してしまう「溶解体験」ということができる。この遊びの体験は、日常の世界と対極の世界でもある。日常の世界とは、仕事を例に取ってみるとわかりやすいが、自己は世界と距離を取り、世界を素材としてさまざまな有用な目的のもとに切り取り、企てる世界である。このように仕事が仕事の外部に目的をもっているのとはちがい、遊びは遊ぶこと以外にいかなる目的ももっていない。そのため、遊びはこの有用性を求める世界への構えを破壊し侵犯することによって実現される。そこで実現されることは、世界に溶解する体験であり、日常の世界では実現されることのない世界との十全な交流の体験である。言い換えれば、子どもは遊ぶことで、生き生きとした生命に触れることができるのだ。世界を自分の力でコントロールすることのできない寄るべない子どもにとって、この世界が自分を庇護して

くれる安全な世界であるということを感じるだけでは十分ではない。この世界が生命に溢れた世界であるという幸福な体験を必要とするのである。遊びはこのような生きた世界を体験する仕掛けである。生きていることの喜びや驚きを、子どもは遊びとして体験することができる。

たしかに、遊びの体験は、結果として、子どものさまざまな能力を高めることになるかもしれない。しかし、それは遊びにとっては二次的なことなのである。結果としてそうなるのであって、それを反転させてそのような効果をめざして遊びを教育の手段として使用しようとする、遊びがもつ本来の力を失ってしまうことになるのである。この大切な体験を発達という視点からだけ見るのではなく、生命に触れる大切さの視点からもとらえることができるなら、子どもの遊び、そしてそれに関わる保育者の役割は、それまでとはちがったものになるはずである。

●Profile

矢野 智司(やの さとし)

京都大学大学院教育学研究科 人間のダイナミックな変容の過程とその変容の機構を、遊びやメタファーや対話、あるいは純粹贈与・供養・薄尽・エロティシズムといった具体的で個別的な現象の人間学的解明を通して、あるいはまた動物絵本や砂場や遊具といったメディアの人間学的解明を通して、明らかにすることをめざしている。

保育者が共に遊ぶとき

嶺村 法子

4歳児が『ねことねずみ』の鬼ごっこをしていた。ここ何日か、大勢で繰り返し楽しんでしたが、今日は、ねこが1人に、ねずみが3人。そのうち、ねこのJくんが「やーめた！」と帽子を脱ぎかけた。通りかかった私は、思わず「入れて！」と声をかけた。「いいよ！先生ねこ？」「うん、ねこになる！」「ミネムラ先生、ねこに入るって！」と大声で叫ぶと、Jくんは帽子をかぶりなおした。

「よーい、ぴっ！」と叫んで、ねこもねずみも陣地から飛び出した。でも、ねずみはすぐに陣地に入り込む。私は「弱虫ねずみ、出ておいで！」とはやし立てるが、なかなか出てこない。そうこうしているうちに、Jくんが「やっば、ねずみになる！」とねずみチームに鞍替えをした。

私は、ねこの陣地で寝るふりをしてねずみをおびき寄せ、飛び起きてダッシュしてKくんを捕まえた。Kくんが「誰か助けてー」と叫ぶ。私はねずみの陣地のすぐ側まで行き、「弱虫ねずみ、出ておいで！」「勇気があるなら助けに来てい！」とはやし立てた。さっきまで一緒にはやし立てていたJくんが真顔で「先生、本当にそんな歌あるの？」と聞いてきた。「ないよ」「えーっ、今作ったの？」「そう、Jくんの顔見ながら作ったの」「えーっ、作ったんだって！」と目を丸くして驚いている。

Jくんは、Kくんを助けようと何度も飛び出しては、私に捕まることを恐れて陣地に駆け戻り、「はーっ」と息を吐く。その様子を保育室から見ていた担任が、「Jくんがんばれ！」と窓から叫んだ。「わ、あんなところから見てる！」とそれはうれしそうな顔をしたかと思うと、意を決したかのように陣地から飛び出した。私は、一瞬追いかけるのを待ち、JくんがKくんの手を握るのを見届けた。「ああ、Jくんに助けられちゃった…」Jくんは、陣地に戻ると「よっしゃー！」と雄叫びをあげた。

その後、「入れて」と次々にねずみの仲間が増え、ねずみはすっかり勇敢になり、捕まえても捕まえても助けられてしまう。ねこチームに担任を誘い、バトンタッチした後も、片付けの時間になるまでこの遊びは続いた。

保育者は、子どもが求めていることを瞬時に判断し、同時に身体で応答している。この遊びに入るときも、私はJくんの様子から思わず「入れて」と声をかけた。そして、仲間として本気で追いかけて、本気で捕まえた。私の中に、そうしないではいられない気持ちがあって、私は子どもたちと一緒に遊んだ。

この遊びの中で、私は2回、助けに来た子をわざと見逃し、捕まえなかった。1回目はJくん。2回目は、Yちゃん。Yちゃんは、ねずみの陣地から、1、2歩離れてはすぐに陣地に戻ることを繰り返していた。私は“キャッツ”よろしくねこのポーズを取りながら、「弱虫ねずみ、出ておいで！」とはやし立て、ついでに一人ずつの名前を呼んで、はやし立てた。芯は強いけれど優しく控えめで、普段そんなことを言われたこともないYちゃんは、そのことがよほど悔しかったのか、私がよそ見をしているのを見て陣地を飛び出し、仲間を助けに一直線に走ってきた。私は抱きしめたい思いに駆られながら、「わあ、Yちゃんに助けられちゃった…」と悔しがった。

普段の生活では許されないことが、“役割鬼”というこの遊びの中では許される。大声で相手を威嚇したり、はやし立てたり。そして、立場が変われば、自分が言われる側に回る。遊びの中でこそ味わえる感情体験である。「悔しい」「助けたい」という思いが、「怖い」「捕まりたくない」という気持ちに勝った！思い切ってやったらできた！これこそ、遊びの醍醐味である。

そのプロセスを共に生きるのが、保育の醍醐味である。

●Profile

嶺村 法子 (みねむら のりこ)
中央区立明正幼稚園教諭。主任として3年目。様々な立場・年齢の教職員、外部講師と協働しながら、日々の保育に携わっている。今年度は特別支援教育コーディネーターとしての役割も加わり、保護者・臨床心理士と話し合いながら個別の指導計画を作成し、一人ひとりのニーズに応じた保育を模索している。

「乳児のあそびと保育者のまなざし」

井桁 容子

日々の保育実践の中で乳児の行為を観ていると、乳児にとって自発的にものかかわる行為は、単なる「あそび」なのだろうか？幾度となくこの疑問がわいてきます。それは、とても「あそび」ということばではかたづけられない立派な目的や知的な好奇心を感じさせられる活動であるという発見や感動をおぼえることが数多くあるからです。

たとえば、ひとり歩きが自由にできるようになってきたTくん（1歳10か月）の例で考えますと、Tくんは棚に並んでいるおもちゃを一日に何度も全部床に落としてしまいます。ブルドーザーがものを押しつけるのときのように、派手な音を立てながら全部みごとに落とすのです。そのたびに、別の場所に誘ったり困った顔をして見せて、なんとかやめてもらえるように働きかけてみるのですが、しばらくするとまたザザッとやられます。

いったい毎日続くこのTくんの行為は、発散なのだろうか？それとも何かおもしろさを感じての目的のあるあそびなのだろうか？と判断しきれず、しばらくその行為を止めないで様子を観察することになりました。すると、Tくんは自分が落としたおもちゃが床の上を転がっていく様子を、毎回振り返りながらじっと目で追っていたのです。なるほどいろいろな音が出ているいろいろな形で転がる様子は毎回異なっていておもしろいのかも、という予想は立ちましたが、確証は持てませんでした。

ある日のこと、庭であそんでいたTくんが「ん！」「ん！」とプラスチックのドーナツ型の輪を保育者に差し出して見せたのちに、地面にその輪を立てるようにして手のひらを使って転がそうとし始めたのです。1歳10か月のTくんにとってこの小さな輪を縦にころがすことはそれほど容易ではなく、何度かやり直したのちみごと転がしてみせました。その様子は、「この形はたしか、こんな風に転がるはず・・・」と知ってるかのようなのです。そのとき、はたと気がきました。その輪は、Tくんがいつも保育室の棚から落としていたおもちゃの中にあつた輪投げの輪と同じものだったのです。

人間の脳は視覚情報をばらばらのパーツに分けて記憶し、ばらばらで記憶できるから情報を自由に組み合わせて創造性として活用できるといわれています。おそらく、Tくんがおもちゃを落とし、その動きをおもしろがって観察していたときに記憶していた様子がここで活用されたのでしょう。“この形のものこんな動きをするはず”という予想ができた、つまり、毎日毎日棚からおもちゃを落として見ているうちに“円形が転がる”という情報がTくんの頭のなかに蓄積されていて、仮説がたてられたわけです。こ

れは見事！というほかはありませんでした。

乳児といわれる時代であっても、自分の感性や好奇心で行動し体験し発見したことは、その子の中で確かなものとして残っているということをTくんのあそびから学びました。

その経験がいつどんなふうに役立つかは本人も私たち大人にもわかりません。しかし子どもの育ちを決して急ぐことなく、意味ある体験の蓄積であるという認識を保育者が持ちながら、乳児のあそびを共感とともに見守ることがその後の子どもの成長にきわめて重要であることは確かなことのように思います。

さらに、子どもが機嫌よくあそんでいると本人に任せてしまいがちですが、実は乳児がひとり遊びを楽しんでいるときほど、信頼する大人がいていねいなまなざしでのがさずタイムリーにその喜びや面白さを共感してくれることが大切です。そのまなざしが子どもの自己肯定感や自己有能感を育む支えとなり、その時のわくわくどきどき感がゆたかな自己表現力や仲間とのコミュニケーション力へと広がっていくのだと思います。

●Profile

井桁 容子 (いげた ようこ)
所属 東京家政大学ナースリールーム主任
研究テーマ 乳児の保育と保育者の専門性

障害を負う子どもにとってのあそびの意味

西原 彰宏

障害を負った子どもにとって、あそぶことにはどんな意味があるのだろうか。

私が障害を負った子どもたちの学校で担任をしていた頃のことである。私が担当することになった小学校3年生の男子は、初めのころ、その表情から気持ちを読みとることが難しかった。目も合わさなかった。

その子どもは、2歳の時、心臓病の手術の後遺症で右半身の手足の自由と聴力を失っていた。それ以来、大好きであった公園の砂場には一切行かなくなったと、これは母親から聞いた。

学校の中では部屋から部屋へと移動すること、広い部屋の床に仰向けに横たわり、動く方の左足を空中高く持ち上げてはふり下ろすことをした。しかし彼は長時間学校の中にいようとはせず、すぐに車いすで学校の外へ散歩に出かけることを求めた。外に行きたいという彼を少し待たせただけで、てんかんの大きな発作が起きた。

職員は、まず彼とどうすれば楽しめるかを考えた。それが実現しなければ、気持ちのやりとりが始まらない。聴力を

を失っても、人と心を通い合わせて楽しむことができること、半身の身体機能を失っても、行きたいと思う場所に実際に行くことができるということ、しかもそのことを助けようとする人たちが彼の周りにいっぱいいるということ、より根底的なこととして、この人生は、ある時は過酷であるかもしれないが、それでも生きるに値するということ、そのように腹の底から思える人間になってほしいと考えていたと思う。

彼が床に足を打ちつけている隣で、もう一人の担任が同じように一緒にやってみる。彼は、その担任の顔を見て、にっこりと笑った。足を打ちつける振動が身体に伝わってくる。音は聞こえなくても、振動は身体や皮膚を通して伝え合うことができる。ここから、彼とにらめっこのように向き合って、大人が身ぶり手ぶりとともに胸いっぱい吸い込んだ息を彼の顔に吹きかけるやりとりや、大人が唇を小さくふるわせ、それを彼が自分の唇を近づけて感じとろうとするやりとりが生まれた。彼の学校の中での活動時間は長くなった。学校に通って来られる日が増えた。

車いすでの散歩を通して、彼は地面におろした左足を使って、行きたい道を主張するようになった。また、散歩の途中うれしそうに大人を振り返り、親しげな眼差しで見るようになった。道をめぐる大人との交渉は複雑になっていき、「もしも、そっちに行くのなら……に寄れなくなるよ」「……に行ってそのあと、君が行きたい～に行くからね」というような、手ぶりによる会話をするようになった。道を選ぶ事とそれに伴うやりとりを通して、彼との間でさまざまな言葉と論理的な思考と交渉が生まれた。

人は人とかかわり合いながら自分を形成して行く。死ぬまで続くこの営みの原動力は、生産に役立つ個体の能力とは違うものである。それは人のかかわりの中で自分を形成することに生きる手ごたえを感じられる「気持ちの力」ではないか。この力は、大人であっても衰弱してしまい、むしろ子どもの方が強い場合も多い。障害のあるなしとも何ら関係がない。

障害があろうとなかろうと、子どもはあそぶことを必要としている。学習に最高価値を置く視点から見れば、子どものあそびは、効率よく学習するための手段であろう。しかし人間にとって、学習は、よりよく生きるための手段にすぎない。子どもはまず生きようとしている。そして、あそぶ。

●Profile

西原 彰宏 (にしはら あきひろ)
国立音楽大学音楽学部音楽教育学科幼児教育専攻 教員(准教授)
研究テーマ: 育つこと・育てること・生きるということはどういうことかの保育実践的研究

「遊び」にどう向き合うか

小川 博久

「遊び」の重視は保育界では常識化されている。「遊びやせんと生れけむ」という名言にあるように、人の子は本来、遊ぶものだといわれ信じている。発達心理学に述べられている発達過程でも、子どもの遊ぶ時期が記述されているケースが多い。

しかし、現実を目を向けると、路上で遊ぶ幼児や児童の姿をみる機会は少なくなっている。学校の放課後や休み時間に校庭へ飛び出して遊ばない児童も増えているといわれている。こうした現実を目にするにつけて、幼児にとって「遊び」は重要であるという言説にリアリティを感じなくなっている大人も増えている。幼稚園では、幼児の「自由遊び」を認めず、一斉保育の妥当性を信じて止まない経営者も多い。また義務教育段階の専門家が幼小関連の議論の中で、幼児期に遊びを重視する保育に否定的見解を示す人も増えている。理由は遊びの教育評価が困難であるからである。さらにこの背景には、放課後、塾に通わせ、学業漬けにすることを強制している父母群がいる。かくて、幼児期の「遊び」の重要性を主張する教育専門家も、幼児の発達にとって遊びは不可欠だという言説が幻想視される状況が迫っていると感じているのではないだろうか。

一方、「遊び」を保育に導入している現場でも、実践者に多くの惑いがある。「遊び」の本質から、幼児の自発性を最大限保障しようとする、喜々として遊ばない子ども、逸脱しようとする子どもが発生し、保護者からは、放任で何も学ばせてないし、躰けにもならないと批判される。逆に、遊びをしっかり教授しようとする、遊びの本質である自発性や意欲は育たないといわれる。事実、遊び保育の実践とされている実情の中には、幼児が自発的に遊びにとりくんで、楽しさを享受し、充実した時間を共有しているとは思えない実践も少なくない。

このような現状を前にして、「遊び」の現実と「遊び」についての言説とどう向き合うべきか。ここでは紙幅の関係で基本的提言を述べるに止めたい。

1. 「遊び」についての自然主義的認識（人間の発達に自然に生まれるもの）という認識を改め、歴史的に成立したものだと思えるべきこと。具体的にいえば、「遊び」は、教授—学習形態が支配的になった近代学校の成立以前の社会において基盤となっていた「みてまねる（観察学習）」という学習形態をとる活動であり、徒弟社会と近似した構造をもつのが異年齢集団の伝承遊びである。近代学校制度の普及やメディア社会の発展とともに、伝承遊びは消滅し、メディア社会における言語情報の氾濫と共に、遊びはメディアを介する個人中心の室内遊び（テレビゲーム）に集約

されるのは必然である。

2. 近代学校による教授—学習は言語を媒介にする学習であり、人間の身体による学びは、言語による教授がかかわる部分があるとしても、基本となるところは、「みてまねる」（観察学習）と試行錯誤であり、前近代社会の職人芸も現代人の身体技能の習得も変わるところがない。その点で「遊び」体験は、幼児期から欠かせないものである。とはいえ、日常生活の場は益々機械化、省力化で身体技能を見てまねる機会は奪われている。学校において、教授による身体技能の獲得は限界を迎えている。人は遊びの技能は言語的に伝えられ（教授され）ても、「自ら身体を使いたい、そのために見てまねたい」という動機は教えられない。動機が伝わるのはそれをするのが楽しいからである。

3. 結論として提案したいのは、市井に「遊び」が消滅しつつある今、われわれは、大人も子どもともに「遊び」世界（見てまねて試行錯誤することを楽しむ世界）を構成しなければならないということである。そこで大人が二重の役を引受けることになる。一つは子どもと「遊び」体験を共有する「遊び」の内側の人間であり、もう一つは、「遊び」空間や状況がいかにか構成されるかを外側から見守り、場をつくる裏方の役割である。この外側と内側とが通底するためには、外から遊び状況を俯瞰し、遊びの場が一つの有機的世界を構成するように、モノや空間配置を設計する役割であり、もう一つは、外の世界と内の世界との臨界に身をおき、幼児たちの動きのモデルとして、あこがれの対象として見て真似る対象となる動きを独自に展開できる大人であることである。幼児が自分から近づかないと獲得できない大人の文化を開示するスタンスをとる存在である。私は遊び保育の実践において、この三つの役割を時に応じて演じ分けることを保育者に要求している。その結果、子どもの「遊び」世界はひらかれるものと確信している。

●Profile

小川 博久（おがわ ひろひさ）
日本保育学会会長
聖徳大学教授